

「翻訳者の信条」研究の必要性と方法論

The importance of studying 'translator beliefs' and its research methods

井上 泉

(マッコーリー大学)

Although the fact that professional translators, who are socially recognized as 'experts', are required to predict risks and solve problems in an exceptional manner, little research has been undertaken from the expert performance perspective in the area of translation studies. To enable novice translators to achieve such an exceptional performance, notion of 'translator belief' appears to hold a key. This is because beliefs and behaviour are closely related, as scholars including Johnson (1991), Williams & Burden (1997), and Woods (1991) posit in the area of teacher education.

This paper will first explore the nature of professional beliefs and their relationship with performance (particularly in terms of predicting risks and solving problems), and this will lead to the discussion of their applicability to the context of translation. I will then present the findings from the analysis of two pilot attitudinal surveys, in which a focus was placed on novice-expert differences in 'translator beliefs' in dealing with such risks and problems. In this study, I generated a 97 item survey in which findings from my previous studies on ways in which novice and expert translators address risks and problems were reflected. This paper will be concluded by discussing the implications of the results of this study to developing novice translators' expertise in translator education.

1. はじめに

本稿の目的は、現在進捗中の博士課程における研究の一部を報告し、今後の翻訳研究および翻訳教育への一助とすることである。

これまでの翻訳研究において「翻訳」とは、翻訳業務の受注後に文章を一つの言語からもう一つの言語に訳す過程及び完成した翻訳の評価を主に意味してきた。しかし、テクノロジーの進歩や業務体系の多様化に伴い、以前にも増してさらに幅広い要件を包含するものでなければならないと言える。翻訳文自体および翻訳の過程に関する研究はむろん重要であるが、現代の翻訳者は多様なニーズに適切に対処するため、翻訳コミュニティが適切とみなすプロとしての信条に精通する必要もあろう。本稿では、このようなプロフェッショナルな信条に焦点を当て、既存研究を基にした「翻訳者の信条」について論じてみる。

2. 'Belief'と'Belief system'について

プロフェッショナルが有する信条に関する研究は、これまでのところ翻訳研究の分野では皆無で

ある。反面、教師教育(teacher education)の分野ではこの概念に関する理論的・実証的な研究が豊富に存在する。よって、本稿では教師教育における研究を基に、翻訳にその概念及び研究結果を応用できるか否かを論じていきたい。

Fennema & Loef-Franke (1992), Thompson (1992), Askew et al. (1997), Campbell et al. (2004)が指摘するように、質の高い教育を実現するには教師の行動のみを研究の対象とするには限界があり、教育に関する教師の「信条」を中心としたより深い仕組みを解明する必要がある。

信条とは、ある個人が所定の状況に遭遇したとき、各個人が有する信条に基づいてその状況を分析し、それが真実であるか否か、またその善悪を判断することと(Abelson, 1979)と言える。Jaspur (1987)は信条の柔軟性に着目し、状況によって変容するものと述べている。この概念は、Woods (1996)が提唱するBAK (Beliefs, Assumptions and Knowledge) モデルにも通じるものがある。このモデルでは、教師の行動がこれら3つの要素によって支えられており、状況の特性によりこれらが複雑に組み合わさって行動に至るとしている。さらに、Woods (1996), Johnson (1994), Clark & Peterson (1986), Munby (1982), Nespor (1987), Pajares (1992), Pintrich (1990)は、状況に内包される諸問題に対処する方法を考案するため、その状況の厳密な把握を行ううえで信条が重要な役割を担っているとしている。また、Fenstermacher (1979), Pajares (1992), Pintrich (1990), Woods (1996)は、信条を基盤とした状況把握が、後続するティーチングの準備及び行動に大きく影響を及ぼすと主張している。以上のように、信条はプロが意思決定を行う方法を知るうえで重要な役割を担っていると言えよう。

教師教育の分野において、'belief'と'belief system'という用語は互換的に用いられるくらいがあるが、厳密にこれらが何を意味するのかを明らかにすることは有用である。既存の文献を参照すると、その共通点として、belief systemがさまざまなbeliefを包含するという図式が挙げられる。Rokeach (1972), Green (1971)はbelief systemを「態度・姿勢」のようなものととらえ、状況に関連するさまざまなbeliefがbelief systemによって体系化されていると考える。また、Green (1971)は、belief systemが総体的な知識母体であり、新たに組み込まれた信条を自動的に体系化するはたらきを有すると考えている。この「体系化」という言葉であるが、これは必ずしもすべての人々に共通したものである必要はなく、基本的にはある個人にとってのみの体系的なシステムである。この点について、Goldin (2002)は、belief systemとbelief structureを厳密に区別する必要性を主張している。すなわち、前者は社会またはプロフェッショナルというコミュニティにおいて共有されているものであるが、後者はあくまでも個人に限定されたものである。この点を翻訳に適用すると、例として倫理的な問題が考えられる。業務依頼が来て、文章の趣旨が翻訳者個人の信条と相反するものである場合、翻訳者は倫理規定に沿ったプロ翻訳者としての信条を考慮したうえで、意思決定しなければならない。このように、翻訳の世界でも両種の信条が存在するものと考えられる。

3. 信条と行動

翻訳者の信条がその行動にいかに関与しているかという疑問は、プロ翻訳者が行う翻訳の質を考える上でのみならず、いかに学生が翻訳における能力を向上できるかを問う上でも極めて重要な意味を持つと考える。ここでの「行動」とは、プロとしての日常業務において遭遇する多様な状

況に対してどのような意思決定を行うのかということの意味している。

この分野の論証的・実証的研究は第二言語習得・数学教育・科学教育の各分野において盛んに行われている。前述のごとく、翻訳学の分野でこのような研究がなされていないことから、まずはこれらの分野での研究結果について論じる。実際のところ、これらの分野でも信条と行動の相関関係について統一した見解が存在しないのが実情である。

この相関関係に肯定的なものでは、Johnson (1991), Woods (1991), Pajares (1992), Burns (1992)らによる研究があるが、いずれも教師の行動が彼らの'teacher belief'によって支えられていることが実証されている。さらに、Fang (1996), Clark & Peterson (1986), Munby (1982), Nespor (1987), Pajares (1992), Pintrich (1990)は、信条が状況の把握を行い、行動するうえでフィルターのようなはたらきをすると述べている。個人が与えられた状況に対応する際、各個人によりその反応の仕方に相違が生じることから、この考えは妥当であろう。つまり状況に遭遇する際、その状況を自らの信条という鏡を通して把握するわけである。また、Woods (1991)と Burns (1992)は、teacher belief が行動に信条が反映される程度及び様態は個人により異なると考えている。

他方、Hoffman and Kugle (1982), Yim (1993), Almarza (1996), Kagan (1992)らの研究では、信条・行動間の相関関係は認められなかった。この理由として、McMullen (1999)は、信条研究が主に教師を対象とした談話分析をその研究方法としているため、教師の実際の行動に正確に反映されていない点を指摘している。さらに Woods (1996)が述べるように、教師が語る自らの信条が必ずしも真に彼らが有しているものとは限らず、「こうあるべき」という個人が考える理想像に基づいている点が問題となり得る。したがって、被験者が確実に自らが有する信条を正確に提示できるような研究方法が必要となろう。すなわち、信条のみを研究対象とするのではなく、被験者が有する信条がタスクの観察などで実際にどのように反映されているのかを研究するのが重要だということである。

4. 信条の発達

信条が行動に影響を及ぼすと仮定した場合、信条が発達するのかどうか、またどのように発達するのかを考える必要がある。教師教育の研究分野において、この点に関しても見解が一致していないのが現状である(Borg, 2003)。Freeman (1993)は、teacher belief は変化し発達するものであり、個人が既存の信条を変容させるような学習の機会をどのような方法・頻度で得られているかに依存していると説く。Ajzen & Fishbein (1980), Battista (1994), Pajares (1992), Borg (2003)は、ティーチング自体の質を向上させるために信条が重要な役割を担っているという見解で一致している。

信条の発達に否定的な立場をとる Williams & Burden (1997), Weinstein (1989)は、個人の信条はかなり早い段階で確立されるものであり、変化に対して耐性が大きいとしている。さらに、Bullough (1989)は、信条の根幹を'lay theory'という観点からとらえている。このlay theory では、長期間にわたって信条が自然に変容する状態を示すものであり、学習や指示と信条の発達との相関関係は対象外となっている。Weinstein (1990), McLaughlin (1991)は実証的研究を基に、教育実習生の信条に大きな変化が見られなかったとし、否定的な見解を示している。

現時点では、上記のどちらに整合性があるかを判断することは困難であるが、信条が発達する可

能性があると仮定した場合、発達のカギを握るのは‘hot spot’という概念にあると考えられる。Hot spot とは、学習者がすでに起こした行動と信条が矛盾する状況のことである(Woods, 1996)。この概念に関しては、次の二つの研究成果が報告されている。第一点は、hot spot により個人の有する既存信条が認識されるということだ。Kagan (1992)によると、学習者が問題に直面するにしがたい、自らの有する利点と弱点を認識し、結果的に信条が発達するという。Griffiths and Tann (1992)は、直接的かつ経験的な学習機会により、学習者は自らの既存信条を認識できるとしている。Lightbown and Spada (1993), Johnson (1994), and Cabaroglu and Roberts (2000)は同様の重要性を強調するとともに、現行の教師教育において上記のような問題（または経験）を中心に据えた教授法が欠如していると指摘する。この指摘は、テキストの分析のみをトップダウンで行うような現在存在する翻訳教授法にも該当するものであり、そこでは現実の翻訳業務で直面する状況を十分に実体験させているとは言えないことから、現在の翻訳教授法は信条の発達において効果的な方法だとは言い難い。第二点は、信条の発達過程における信条の再構築についてである。学生が hot spot に遭遇し、自らの既存信条を認識した場合、その信条と自らの行動の矛盾を確認しようとするのは自然な行為であろう。Kagan (1992)が指摘するように、このような状況を学生が経験することにより、既存の信条の再構築が可能になる。Nespor (1987), Wood, Cobb & Yackel (1991)は、信条の矛盾を浮き彫りにする状況に直面することで、学生は他の解決策を求めて、自らの信条を変えざるを得ないと認識することになると述べている。これに関連し、Woods (1996)は、教師の意思決定が連鎖的な構造を特徴としていることに着目している。すなわち、action, interpretation, planning が継続的に行われているということであり、このような連鎖的な構造により学生の知識およびスキルの心理的な習熟度が向上するとしている。以上の二点より、学生の信条の進歩と問題解決が密接に関係していると言えるのではなかろうか。言い換えれば、学習者にとって難易度の低いタスクではこのような hot spot への「気づき」が生じる可能性が低く、反対にかなり解決することの困難な状況に直面し、その解決法を考案するという問題解決のプロセスが信条の発達に影響を及ぼす可能性があるということである。

5. 信条とリスク予見・問題解決

上記の hot spot が信条の発達にとって重要な役割を果たしているとした場合、プロフェッショナルが有する信条と問題解決力の相関関係についてもさらに考える必要がある。Shavelson and Stern (1981) は教師教育の分野において、teacher belief が教師の意思決定および行動に明らかな影響力を及ぼしており、ある問題を解決するのに必要な情報が存在しない場合は特にこの傾向が顕著にみられるとしている。問題が発生し、それを解決しなければならない状況に直面した場合に意思決定が求められることから、信条と問題解決の相関関係は注目に値すると言える。

Bandura (1986), Hart (1989) は信条が意思決定のプロセス及び行動の明らかな基準だとすると同時に、信条により将来の行為を予見することが可能だと主張している。リスク予見に関するこの見解は、翻訳におけるプロ翻訳者・学習者間の差異にも適用することができる。というのも、翻訳学習者とプロ翻訳者を対象とした事前研究において学習者は顕在化した問題を特定し（これも不完全ではあったが）、解決することに集中するばかりであって、リスクを予見することができなかったか

らである。他方プロ翻訳者は過去の経験及びそこから得たリスク予見法の知識により、類似する状況に過去のリスク予見を応用していた。この差異は、単に経験の相違のみならず、学習者もしくはプロ翻訳者が翻訳コミュニティにおいて適切とみなされるプロフェッショナルな信条をどのように把握していたかも影響を与えていることを示しているのではなかろうか。

6. プロが有する信条

前述の通り、信条はある個人が個人的に信じる事柄だと定義されたが、この定義はプロがどのような信条をプロのコミュニティにおいて有しているかという点とは一線を画すものであった。Pajares (1992), Cobarogu and Roberts (2000)は、プロフェッショナル教育における社会化を通して個人的な信条がプロの信条に移行すると主張している。さらに、Thompson (1992), Henningsen & Stein (1997), Evans (2000)は、社会的な諸状況で生じるプロ間の交流により、信条の社会的な発達が促進されると指摘している。上記を翻訳の分野に当てはめると、翻訳業務に関わっている人々（例えばクライアントや他の翻訳者）の役割に関する信条、そして翻訳コミュニティにおける翻訳者の役割に関する信条がいかに適切かが、最終的な翻訳の質を左右する可能性があると考えられる。社会心理学の分野では、Holland and Quinn (1987: vii)は「共有されたある世界に関する前提」が自らの社会におけるアイデンティティを調整する役割を演じていると述べている。翻訳の世界においても、コミュニティで受容される範囲の諸信条を把握することが、プロ翻訳者を目指す学生にとって、自らの社会的信条を発展させるカギと考えられよう。

7. 信条の翻訳との関連性

翻訳研究の分野では、これまでのところ「翻訳者の信条」に焦点を当てた研究が存在していない。これまで述べた既存の研究は主に教師教育の分野における信条に関するものであったが、これらは翻訳の分野にも応用できるものだと考える。その理由として、第一に、教師と同様に翻訳者は、リスク予見・問題解決における意思決定を行う際に、適切な判断を下すことが求められるという点である。質の高い翻訳を実現するために、意思決定のプロセスにおける信条を明確化することが重要なのもとり、このような信条が実際の行動にいかに関与しているかを把握する必要があると言えよう。第二点は、教師と翻訳者が社会的に「プロフェッショナル」として認められた職業であり、学習者からプロへというプロセスをたどるという共通性がある。第三に、教師と同じく、翻訳者も計画・意思決定・内省というプロセスを経て、最終的な翻訳に到達するという面で共通性がある。具体的に述べると、翻訳における計画とは、対象読者、文体、ジャンル、納期など translation brief で示された SLT の諸要素をまずは把握し、それに基づいた計画を立て、その後さまざまな意思決定を行う必要があるということである。また翻訳者の内省では、過去の類似する経験や知識との照合が行われるとともに、自らの翻訳に対し客観的な批判も行う必要がある。さらに、翻訳の世界においても、学生の翻訳力が経験を積みプロレベルに到達するという保証がないことから、プロレベルへの翻訳力の移行に信条および belief system が果たす役割が存在する可能性があると言え

る。したがって、belief system と翻訳に関連性があるという上記の仮説に基づき、学習者・プロ翻訳者間の信条における相違を研究することに意義があると考ええる。

8. 翻訳者の信条に関する研究方法について

本項では、進行中の研究に関する方法論を概説する。本研究の主目的は以下の二点を明らかにすることであった。

1. リスク予見および問題解決において、プロ翻訳者と翻訳学習者がどのような信条を有しているのか。
2. リスク予見および問題解決において、プロ翻訳者と翻訳学習者間の信条にどのような相違点があるのか。

翻訳におけるリスク・問題の特定及び予見・解決方法の特定をテーマとした事前研究では、フォーカスグループ及び個別インタビューという質的研究方法を採用したが、今回の研究においては、量的研究を採用することとした。この理由としては、質的・量的研究を混合することで、研究結果にさらなる信頼性および有効性が生じる(Cohen & Manion, 1994 and Leary, 2008)ことが挙げられる。

プロ翻訳者・学習者間の相違点の特定に基づき、そのような相違点の「要因」を発見することが本研究の結果を翻訳教育に応用するうえで必要不可欠なものとなる。したがって、Glatthorn Joyner (2005)が示すように、観察された現象の理由となる要因を探る量的研究を行う意義があると言えよう。

本研究では量的研究の手法のうち、アンケートを用いることとした。理由としては第一に、アンケートが特定のテーマに関する回答者の態度・価値・信条の集散的な測定に適していることである(Fink, 2006; Nardi, 2006; Walter, 2010)。第二に、統計分析法を用いることにより、変数間の相関関係を明らかにすることが可能なことである(Walter, 2010)。つまり、回答者の信条を支える諸要因をこのような相関関係から特定することで、信条同士の相関関係、さらには各信条をより掘り下げて考察できる可能性があるということである。

9. アンケート構築について

翻訳研究の分野における翻訳者の信条に関する類似の研究が存在しないことから、まったく新しいアンケートを構築する必要がある。アンケート構築においては、事前研究の結果をアンケートに反映させる作業から始めた。具体的には、事前研究におけるプロ翻訳者・学習者間のリスク予見・問題解決に関する相違点をグループ化し、回答者の信条を測定するためにアイテム化していった。また、アイテムに対する回答者の自らの信条に基づいた共感度を測定する必要があるため、5段階の Likert Scale を用いることとした。

本アンケートが既存アンケートの複製化とは性質が異なるものであり、有効性が未だ実証されていないことから、予備的研究を2回実施した。その理由は、回答者による各アイテムの誤った解釈

および曖昧性を避け、有効性を実現することである。各予備的研究の実施後、その結果を統計的に分析することで信頼性と有効性を確認するとともに、アイテムの言葉使いとアンケートの構造そのものを改善した。予備的研究ではいずれも7名の英日翻訳学習者(大学院レベル)を回答者とした。回答者数の面でかなり制限があるが、これは学習者が所属する大学院ではその人数に制限があるため、最終的なアンケート実施時における回答者数を確保するための措置である。予備的研究においては、相関係数が統計的分析方法として採用された。これは、Haris (1998)が指摘するように、変数間の相関関係を特定することに適しているためであり、その結果、アンケートのアイテム構成が本研究の主目的を適切に反映したのか否かを判断することが可能となる。

まず、1回目の予備的研究から以下のような諸問題が浮上した。第一点目は、依頼のあった業務で要求される翻訳スピード及びクライアントの信頼性の二点が翻訳上の「問題」とはみなされなかったことである。リスク予見に関し、翻訳における原文への正確性および自然な訳文の実現とテキストタイプにおける正確性・自然な訳文のバランス変化の間の相関関係が低かった($r=.346$) ことにも注目した。というのも、談話分析を用いた事前研究の結果では、上記二点に密接な関係が見られたからである。次に読者層に関する問題においては、「読者層に最適な翻訳ができると思う」、「原文と訳文における文化的な相違があることから、文化的に特有な表現の翻訳は困難だと思う」という2アイテムが極めて低い相関係数 ($r=.038$) を呈した。この理由としては、2つ目のアイテムにある「文化的に特有な表現」の定義が曖昧だったことが考えられるため、2回目の予備研究におけるアイテムの言語的な改善が必要となった。

上記の結果、アンケートの言い回しの改善が図られ、信頼性と有効性を向上させるため、ひとつのポイントに派生するアイテム数を増やし、さらに幅広い側面から信条を探る工夫を施した。2回目の予備研究は、アイテムの内容および言葉使いでの改善により、統計的な変化が見られるかを主眼としたため、1回目とまったく同じ回答者を対象とした。結果的に、上記の諸問題はいずれも解消されたが、新たな問題も浮上した。リスク予見の分野においては、「翻訳業務における業務量をクライアントが把握しているか否かを判断することができる」、「原文に関してクライアントと確認が必要な場合、クライアントがどの程度協力的か判断できる」という2アイテムで低い相関関係 ($r=.324$) が示された。これらアイテムがいずれも翻訳者にとって必要な情報を提供するうえでのクライアントの態度に関するものであることから、改善の必要性が考えられた。次に浮上したのが、中立性および倫理に関し、「翻訳レートが魅力的なものであれば、翻訳の中立性が保てなくても業務を引き受ける」、「社会的に受け入れられない内容の文章の翻訳を依頼された場合、業務依頼を断る。」という2アイテムで相関関係の低さが示された($r=-.053$)。さらに、「英語の原文を正確に理解するうえで、自分の英語力は十分だと思う。」・「対象読者にとって適切な読みやすい翻訳を行ううえで、自分の日本語力は十分だと思う。」という2アイテムにおいても、期待された相関関係が示されなかった($r=-.078$)。これらのアイテムがいずれも翻訳者の第一・第二言語の運用能力に関するものであり、原文の正確な理解および適切な形での訳出において極めて重要な要素であることから、両アイテムの再検討が必要であるとの結論に至った。

以上、二度の予備研究の結果を踏まえて、アイテムの言い換え、変更、削除、追加を行い、最終的なアンケートを構築した(付録1参照)。さらに、有効性を向上させるため、プロ翻訳者および翻

訳教育者のグループからのフィードバックを得、それを反映させた。また、ひとつの問題に対し複数のアイテムを作成することで、アンケートの信頼性の向上を図った。これは、人々の認知や価値、信条が多面的な特徴があり、ひとつのアイテムのみでこれらを測定するのが困難であるからである。従って、最終的なアンケートでは、各問題またはリスクにおいて考え得るすべての局面を考慮し、複数のアイテム使用によりこれらの問題・リスクの対処法に関する信条を発見するよう努めた。さらに、学習者は未だ実際の翻訳業務を行った経験がないため、プロ翻訳者用のアンケートに比べ、「仮定的な」言葉使いにする工夫を施した。

10. 回答者及びアンケート実施方法について

本研究は翻訳者の信条におけるプロ翻訳者・学習者間の相違点を主眼とする性質上、回答者はプロ翻訳者と学習者に分類された。本研究では、プロ翻訳者としての経験の有無を基準とすることから、意図的サンプリングを適用した。「学習者」は、研究実施時点において、大学院にて翻訳・通訳のコースに在籍する者を対象とした。「プロ翻訳者」はオーストラリアにおいて NAATI のプロ翻訳者レベルに認定されており、なおかつ翻訳業務の経験を有する者と、翻訳業務の経験のある日本のプロ翻訳者を対象とした。Tabachnick and Fidell (1989)が指摘するように、データの信頼性及び有効性を実現する上で 100 名以上の回答者数が必要なことから、英日翻訳者および学習者のみを対象とすることは、サンプルの面で非現実的であると判断した。従って、本アンケートでは、プロ翻訳者・学習者のいずれも NAATI 認定の対象となる全言語を対象とすることにした。回答率についてであるが、プロ翻訳者の場合、250 名中 96 名から回答を得、学習者では 150 名中 86 名がアンケートへの参加に同意した。回答者の主要第一言語及び性別は以下の通りである。

Main	Sub	Number	Percentage
性別	女性	61	69.3
	男性	27	30.7
第一言語	日本語	27	28
	中国語	18	19
	英語	4	4
	韓国語	3	3
	スペイン語	3	3
	イタリア語	3	3
	ドイツ語	3	3

表 1. 回答者の背景情報

回答対象者へは、まず始めに電話によるアンケート依頼を行い、アンケートへの参加を承諾した人々には電子メールにてアンケートおよびその他必要な情報を伝えた。従って本研究におけるアンケートは自己記入方式であり、記入後に郵送にてアンケートを返送する形をとった。

11. データ分析方法

上記により収集された量的データの分析においては、統計分析ソフトである SPSS ver.16.0 を用い

るとともに、2種類の統計的方法を採用した。すなわち、因子分析（以下‘FA’）及び多変量分散分析（以下‘MANOVA’）である。まずFAによる分析を行ったが、この方法は従変数群がどのようなグループを形成するか（Hair, Anderson, Tatham & Black, 1995; Breakwell, Hammond & Fife-Schaw, 2000）を目的とするものである。その結果、プロ翻訳者・学習者間でbelief systemがどのように構成されているのか、構成の相違の有無が示されることとなる。FAの利点としては、多変量データに対して分析プロセスを短絡化できることが挙げられる。この短絡化により、belief systemの縮図が示され、そこからbelief systemを支える「要素」が表面化することになるわけである。Tabachnick & Fidell (2007)が述べるように、結果として満足の行く解が得られるまで、異なる要素数を用いてFAを行う必要がある。よって、本研究においては、SPSSのデフォルト設定である2要素をまず使い、その後結果に応じて要素数を増やすことを試みることにした。

FAから生成した統計結果は、多変量データをグループ化することにとどまるため、MANOVAによる分析を必要とした。MANOVAはHair (1995), Taylor (2002) が指摘するように、従変数が2つ以上ある場合の分散を分析するうえで極めて有効な方法である。さらに、MANOVAを用いることで、複数の独立変数に基づいた従変数間の相違を測定できること(Sharma, 1996; Hair, 2006)から、結果として独立変数間の相違を最大限引き出すことが可能になる(Hair, 2006)。これは、本研究の主目的の一つが翻訳者の信条におけるプロ翻訳者・学習者間の相違を調査することであることから、従変数グループ（すなわちアンケートのアイテム群）・独立変数（プロ翻訳者・学習者別の回答）間で表される翻訳者の信条における相違点を特定するうえで、有効だと考えた。

12. 今後の研究・展望

本研究が現在データ分析の途中であることから、本稿では結果を報告するには至らなかったが、「翻訳者の信条」という新たな概念を提起するとともに、研究結果で何らかの相違がプロ翻訳者・学習者間で浮上した場合、翻訳教育におけるその意義は大きいものと考えられる。前述の通り、翻訳の領域においても、信条の発達に可能性が考えられ、かつ時間を要するものだと仮定すると、今後の翻訳教育において、翻訳者の信条を発達させる機会を盛り込むことの必要性も生じてこよう。反面、これまでの事前研究及び本研究においては、プロ翻訳者及び学習者が「リスク・問題にこのように対処するであろう」という回答者の見解を中心に調査してきたわけだが、このような回答がプロ翻訳者・学習者が実際に採用する対処法と一致する保証はない。したがって、できる限り実際の業務に近似した状況下での対処法を観察することも今後必要となる。信条・行動の両面における研究の結果に基づいて、具体的にこれらを反映した翻訳教育方法（例えばProblem-Based Learning）を導入し、どのような成果が得られるかを今後の研究課題としたい。

.....
【著者紹介】井上 泉(INOUE Izumi) オーストラリア・マッコーリー大学大学院言語学部講師。専門は翻訳理論、翻訳教育、エキスパート論。現在、同大学にて博士課程に在籍。
.....

参考文献

- Abelson, R. P. (1979). Differences between belief and knowledge systems. *Cognitive Science*, 3, 355–366.
- Almarza, GG, (1996). Student foreign language teacher's knowledge growth. In Freeman, D. and Richards, J.C., (Eds.). *Teacher Learning in Language Teaching*, Cambridge University Press, Cambridge, pp. 50–78.
- Askew, M., Brown, M., Rhodes, V., Johnson, D., & Wiliam, D. (1997). *Effective teachers of numeracy, final report*. London: Kings College.
- Ajzen, I., & Fishbein, M. (1980). *Understanding attitudes and predicting social behavior*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. , Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Battista, M. T (1994). Teacher beliefs and the reform movement in mathematics education. *Phi Delta Kappan*, 75, 462-470.
- Borg, S. (2003). Teacher cognition in language teaching: A review of research on what language teachers think, know, believe, and do. *Language Teaching*, 36, 81-109.
- Breakwell, G. M., Hammond, S., & Fife-Schaw, C.(Eds) (2000). *Research methods in psychology*. 2nd ed. London: Sage Publications.
- Bullough, R. V., Jr. (1989). Teacher education and teacher reflectivity. *Journal of Teacher Education*, 40(2), 15-21.
- Burns, A. (1992). Teacher beliefs and their influence on classroom practice. *Prospect* 7/3:56-66.
- Cabaroglu, N. & Roberts, J. (2000). Development in student teachers' pre-existing beliefs during a 1-year PGCE program, *System* 28 (3) (2000), 387–402.
- Campbell, Kyriakides, Muijs, & Robinson (2004). *Assessing teacher effectiveness: Developing a differentiated model*, Routledge Falmer, London.
- Clark, C.M., & Peterson, P.L. (1986). Teachers' thought processes. In Wittrock, M.C. (Ed.), *Handbook of research on teaching* (3rd ed., pp.255-296). New York: Macmillan.
- Cohen, L. & Manion, L. (1994). *Research methods in education* (4th ed.). London: Routledge.
- Evans, J. (1994). 'Quantitative and Qualitative Research Methodologies; Rivalry or Cooperation?' In: Da Ponte, J.P. & Matos, J.F. (Eds.) *Proceedings of the 18th Conference of the International Group for the PME* (Vol.2), 320-327.
- Fang, Z. (1996). A review of research on teacher beliefs and practices. *Educational Research*, 38(1), 47–65.
- Fennema, E., Carpenter, T. P., & Loef, M. (1990). *Teacher belief scale: Cognitively guided instruction project*. Madison: University of Wisconsin.
- Fenstermacher, G.D. (1979). A philosophical consideration of recent research on teacher effectiveness. In L.S. Shulman (Ed.), *Review of research in education* 6, F.E. Peacock, Itasca, IL.

- Fink, A. (2006). *How to Conduct Surveys: A step-by-step guide (Third Edition)*. Thousand Oaks, London, New Delhi, Sage Publications.
- Freeman, D. (1993) Renaming experience/reconstructing practice: developing new understandings of teaching, *Teaching and Teacher Education*, 9(5), pp. 485–497.
- Glatthorn, A. A., & Joyner, R. L. (2005). *Writing the winning theses or dissertation: A step-by-step guide* (2 ed.). Thousand Oaks. Corwin Press.
- Goldin, G.A. (2002). *Affect, meta-affect and mathematical belief structures*. Teoksessa G. C.
- Green T. F. (1971). *The activities of teaching*. McGraw-Hill, New York
- Griffiths, M. and Tann, S., (1992). Using reflective practice to link personal and public theories. *Journal of Education for Teaching* 18 1, pp. 69–84.
- Hair, J., Black, B. Babin, B., Anderson, R. and Tatham, R. (2006). *Multivariate Data Analysis* (6th edition). Upper Saddle River, NJ: Prentice-Hall.
- Hair, J. F, Anderson, R. E., Tatham, R. L., & Black, W.C. (1995). *Multivariate data analysis* (4th ed.). NJ: Prentice Hall.
- Harris, L. C . (1998). Cultural domination: the key to a market oriented culture?. *European Journal of Marketing*, 32, 3/4, 354-373.
- Hart, K. (1989). There is little connection. In Ernest, P. (Ed.), *Mathematics teaching: The state of the art*. London: Falmer.
- Henningsen, M. & Stein, M. K. (1997). Mathematical tasks and student cognition: Classroom based factors that support and inhibit high-level mathematical thinking and reasoning. *Journal for Research in Mathematics Education*. 28(5). 524-549.
- Hoffman, J.V., & Kugle, C. (1982). A study of theoretical orientation to reading and its relationship to teacher verbal feedback during reading instruction. *Journal of Classroom Interaction*, 18, 2-7.
- Holland, D. and Quinn, N., (Eds.), (1987). *Cultural Models in Language and Thought*, CUP, Cambridge.
- Jasper, J.M. (1987). Two or Twenty Countries: Contrasting Styles of Comparative Research. *Comparative Social Research*, vol. 10, 205-229.
- Johnson, K. E. (1994) The emerging beliefs and instructional practices of preservice English as a second language teachers. *Teaching and Teacher Education*, 10, 439–452.
- Kagan, D. M. (1992). Implications of research on teacher belief. *Educational Psychologist*, 27(1), 65–90.
- Leder, E. Pehkonen & G Törner *Beliefs: A Hidden Variable in Mathematics Education?*
Boston : Kluwer Academic Publishers, 59–72.
- Lightbown, P.M. and Spada, N., 1993. *How Languages are Learned*. , Oxford University Press, Oxford.
- McLaughlin, J. (1991). Reconciling care and control: Authority in classroom relationships. *Journal of Teacher Education*, 40(3), 182–195.
- McMullen, Mary Benson. (1999). Characteristics of teachers who talk the DAP talk and walk the DAP walk. *Journal of Research in Childhood Education*, 13(2), 216-230.
- Munby, H. (1982). The place of teachers' beliefs in research on teacher thinking and decision making, and an

- alternative methodology. *Instructional Science*, 11, 201-25.
- Nardi, P. M. (2006). *Doing Survey Research: A Guide to Quantitative Methods*. Boston, MA, Pearson Education, Inc.
- Nespor, J. (1987). The role of beliefs in the practice of teaching. *Journal of Curriculum Studies*, 19(4), 317-328.
- Pajares, M. F. (1992). Teachers' beliefs and educational research: Cleaning up a messy construct. *Review of Educational Research*, 62 (3), 307-332.
- Pintrich, P.R. (1990). Implications of psychological research on student learning and college teaching for teacher education. In: W.R. Houston (Ed.), *Handbook of research on teacher education*, Macmillan, New York, pp. 826-857.
- Rokeach, M. (1972). *Beliefs Attitudes and Values*. San Francisco: Josey-Bass.
- Shavelson, R.J. & Stern, P. (1981). Research on teachers' pedagogical thoughts, judgements, decisions, and behavior. *Review of Educational Research*, 51, 455-498.
- Tabachnick, B. G., & Fidell, L. S. (1989). *Using multivariate statistics* (2nd ed.). Cambridge: Harper & Row.
- Taylor, A. (2002). *Multivariate Analyses with manova and GLM*. Department of Psychology, Macquarie University, Sydney, Australia.
- Taylor, A. (2002). *Introduction to SPSS with Windows*. Department of Psychology, Macquarie University, Sydney, Australia.
- Thompson, A.G. (1992). Teachers' beliefs and conceptions: A synthesis of the research. In: Grouws, D.A. (Ed.) , *Handbook of research on mathematics teaching and learning*, Macmillan, New York, pp. 127-146.
- Walter, M. (2010). *Social Research Methods (Second Edition)*. Oxford, Oxford University Press.
- Weinstein, C. (1989). Teacher education student's perceptions of teaching. *Journal of Teacher Education*, 40 (2), 53-60.
- Wood, T., Cobb, P. and Yackel, E., (1991). Change in teaching mathematics: A case study. *American Educational Research Journal* 28 3, 587-616.
- Woods, D. (1996). *Teacher cognition in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yim, L.W. (1993). *Relating Teachers' Perceptions of the Place of Grammar to their Teaching Practice*. (Master's thesis, Singapore: National University of Singapore).

付録1 最終版アンケートⁱ

A survey on your beliefs as a translator (Novice Translators)

A. Problem posing

No	Statement	Scales
1	I am confident that I would be able to predict potential problems in an offered job even if the problems have not been explicitly referred to.	1 2 3 4 5
2	If I were to receive a translation job, I would be able to anticipate how difficult the job would be.	1 2 3 4 5
3	<i>Further to the statement above, please circle one of the scales for each item. Please note that the following statements are to do with the stage BEFORE deciding whether to accept the job or not.</i> The main factor that I would consider when deciding to accept the job are the extent to which:	
	a I would be able to produce a translation in my language A appropriate for target readers.	1 2 3 4 5
	b I would be able to fully comprehend the meanings of the original text.	1 2 3 4 5
	c The job requires a tight turn-around time.	1 2 3 4 5
	d I possess the background knowledge necessary to translate the content of the original text.	1 2 3 4 5
	e The offered job would be cost-effective for me whether to accept.	1 2 3 4 5
4	My decision whether to accept a job would be based on the extent to which the job is likely to pose difficulties.	1 2 3 4 5
5	a I would be generally unlikely to withdraw from a translation job, once I have begun working on it.	1 2 3 4 5
	b I believe that withdrawing from a translation job after accepting it would not be acceptable.	1 2 3 4 5
	c I feel that withdrawing from a translation job would be sometimes unavoidable.	1 2 3 4 5
6	a I would be capable of judging whether the client realises the amount of work involved.	1 2 3 4 5
	b I would be capable of judging whether I can establish a comfortable working relationship with a client.	1 2 3 4 5
	c I would be capable of judging how cooperative a client would be if I	1 2 3 4 5

		needed to ask questions about an original text.	
7	a	I feel that the capacity of a client to provide error-free information would be an important factor in completing a job successfully.	1 2 3 4 5
	b	I feel that a client's willingness to facilitate my talking to other people (e.g. the writer, an expert in the field) would be an important factor in completing a job successfully.	1 2 3 4 5
	c	I feel that the capacity of a client to provide necessary information in a prompt manner would be an important factor in completing a job successfully.	1 2 3 4 5
8		If I were to take on a job, I would be confident about estimating the cost effectiveness of (from my point of view) the job.	1 2 3 4 5
9	a	I can imagine taking on a job for financial reasons even though I would find it difficult to be impartial.	1 2 3 4 5
	b	I can imagine taking on a job as a means of enhancing my career as a professional even though I would find it difficult to be impartial.	1 2 3 4 5
10	a	If I saw that the content of a text was not providing true information, I would decline a job offer.	1 2 3 4 5
	b	If I regarded the content of a text as unacceptable in contemporary society, I would decline a job offer.	1 2 3 4 5
11		I think that I would be able to predict potential complaints about the content of the text from target readers.	1 2 3 4 5

B. About the cost and benefit of accepting or declining a translation job

In each of the following scenarios, some level of compromise would be necessary. Notwithstanding this, please indicate **the extent to which you would be willing to accept the offered job, if you were to be in such situations.**

1	<i>Given that the offered job is to be paid well, how willing would you be to accept a job in which;</i>		
	a.	the required translation speed is greater than your usual speed?	1 2 3 4 5
	b.	the content of the original text is not within your specialised area of translation?	1 2 3 4 5
	c.	the original text does not make sense due to linguistic errors?	1 2 3 4 5
	d.	the original text does not make sense due to errors in its logical argument?	1 2 3 4 5

	e.	the client's reputation is not known in the translation community?	1	2	3	4	5
2	<i>Given that you could gain good professional experience by undertaking the job, how willing would you be to accept a job in which;</i>						
	a.	the required translation speed is greater than your usual speed?	1	2	3	4	5
	b.	the content of the original text is not within your specialised area of translation?	1	2	3	4	5
	c.	the original text does not make sense due to linguistic errors?	1	2	3	4	5
	d.	the original text does not make sense due to errors in its logical argument?	1	2	3	4	5
	e.	the client's reputation is not known in the translation community?	1	2	3	4	5
3	<i>Given that the client enjoys a good reputation in the translation community, how willing would you be to accept the job in which;</i>						
	a.	the required translation speed is greater than your usual translation speed?	1	2	3	4	5
	b.	the content of the original text is not in your specialised area of translation?	1	2	3	4	5
	c.	the original text does not make sense due to its linguistic errors?	1	2	3	4	5
	d.	the original text does not make sense due to its errors in its logical argument?	1	2	3	4	5

C. Risk-posing/ problem-solving during the process of translating

C1. (Concerning the issue of accuracy vs. naturalness)

1= Strongly Disagree, 2= Disagree, 3= Uncertain, 4= Agree, 5= Strongly Agree

No	Statement	Scales	
1	I feel that it would be easy to maintain both accuracy to an original text and naturalness in a target text.	1 2 3 4 5	
2.	I feel that my command of English is sufficient to accurately comprehend an English text.	1 2 3 4 5	
3.	I feel that the command of my language A is sufficient to produce an acceptably readable translation in my language A for target readers.	1 2 3 4 5	
4.	In order to be able to accurately comprehend an original text, I believe that I possess enough domain-specific knowledge in the following areas;		
	a.	Medical	1 2 3 4 5
	b.	Legal	1 2 3 4 5

c.	IT	1 2 3 4 5
d.	Business/ finance	1 2 3 4 5
e.	Literary	1 2 3 4 5
f.	Engineering/ Technology	1 2 3 4 5
g.	Governmental	1 2 3 4 5
h.	Other (please specify and circle the applicable scale for each item) _____	1 2 3 4 5
5.	In order to be able to produce a translation in my Language A which is acceptably readable for target readers, I believe that I possess enough domain-specific knowledge in the following areas;	
a.	Medical	1 2 3 4 5
b.	Legal	1 2 3 4 5
c.	IT	1 2 3 4 5
d.	Business/ finance	1 2 3 4 5
e.	Literary	1 2 3 4 5
f.	Engineering/ technology	1 2 3 4 5
g.	Governmental	1 2 3 4 5
h.	Other (please specify and circle the applicable scale for each item) _____	1 2 3 4 5

C2. [Concerning the issues of impartiality]

1.	I am generally able to translate without influence of bias.	1 2 3 4 5
2.	I am able to avoid biases in translating which might lead to objections by target readers.	1 2 3 4 5
3.	I am able to judge whether an original text contains material which is contrary to publicly-accepted morality.	1 2 3 4 5
4.	Where a text goes against publicly-accepted kinds of morality, I find it difficult to maintain impartiality.	1 2 3 4 5

D. Relationship with a client in a translation job

No	Statement	Scales
1	I believe that I possess an ability to communicate appropriately with a client.	1 2 3 4 5
2	a. I would dislike reporting bad news (e.g. the deadline needs to be delayed, technical problems) to a client.	1 2 3 4 5
	b. I would do everything possible to avoid a client gaining a negative impression of me.	1 2 3 4 5

3	a	I believe that I know how to negotiate the rate of the translation service with a client.	1	2	3	4	5
	b	I believe that I know how to negotiate the extension of a deadline with a client.	1	2	3	4	5
4	I believe that I know how to decline an offered job without offending a client.		1	2	3	4	5
5	If there are defects in an original text (e.g. incorrect information, incorrect language use), I would point these out in a direct manner (e.g. saying 'the information is incorrect').		1	2	3	4	5
6	I believe that the best way of clarifying any parts in an original text which pose ambiguity would be ;						
	a	by checking with a client.	1	2	3	4	5
	b	by checking with a native speaker of English.	1	2	3	4	5
	c	by checking with an expert (of the specialised area).	1	2	3	4	5
	d	by checking with a fellow translator.	1	2	3	4	5
	e	Other (please specify and circle the applicable scale for each item) _____	1	2	3	4	5
7	If I have to face a situation where information on readership had not been provided, I would feel that I should check this with the client.		1	2	3	4	5
8	I would check a client's preference in terms of the style of the translation.		1	2	3	4	5
9	I think that I would be able to build a sound relationship with a client.		1	2	3	4	5
10	a.	I believe that I would be able to assess the personality of a client easily.	1	2	3	4	5
	b.	I believe that I would be able to communicate appropriately with a client of differing personalities.	1	2	3	4	5
11	When explaining my translation to a client, I would not want to give an impression that I was making excuses for deficiencies on my part.		1	2	3	4	5
12	In order to avoid any misunderstandings, I feel it would be essential to justify my translation decisions to a client.		1	2	3	4	5
13	I would feel comfortable about giving advice to a client regarding the improvement of the SLT content in order to give a more positive impression to target readers of the target text.		1	2	3	4	5
14	I would feel comfortable about giving advice to a client regarding stylistic improvements so as to give a more positive impression to target readers of the target text.		1	2	3	4	5

E. Readership

No	Statement	Scales
1	I believe that I can produce a translation which achieves the most suitable readability for	1 2 3 4 5

	the target readers.	
2	I am confident that I possess sufficient knowledge of cultural differences between English and my language A.	1 2 3 4 5
3	I am comfortable about translating an original text which contains a number of cultural-specific terms.	1 2 3 4 5
4	I feel that culturally-specific terms are generally hard to translate into a target language due to cultural differences between SL and TL.	1 2 3 4 5
5	I know what additional information needs to be provided to enable target readers to comprehend the target text easily.	1 2 3 4 5
6	I feel that a translator should provide additional explanations as much as possible so as to assist readers to achieve the best reader comprehension.	1 2 3 4 5
7	In case of literary texts, I am confident about maintaining the tone and style of the original text in the target text.	1 2 3 4 5
8	I know how to produce a translation which is appropriate to the readers' cultural knowledge of the source and target culture.	1 2 3 4 5

F. Research

No	Statement	Scales
1	My readiness to use proper nouns (e.g. organisational names, names of position, people's names) depends upon the authoritativeness of the source (e.g. the website of the Australian Embassy).	1 2 3 4 5
2	Where dictionaries give word equivalences, I regard these as generally reliable.	1 2 3 4 5
3	a. I am confident about how to search information using the Internet.	1 2 3 4 5
	b. When I look for 2 or more possible equivalences using Google, I generally rely on the relative number of hits I obtain.	1 2 3 4 5
4	It is important to use multiple resources to gain necessary information.	1 2 3 4 5
5	If I were to seek agreement from a client for me to check unclear matters with an expert, I would worry that this would give the client a negative impression of my competence.	1 2 3 4 5
6	If I were to ask questions of a client about unclear matters in a source text, I would worry that a client may think that I am not a competent translator.	1 2 3 4 5

7	I think it would be worthwhile to go and learn directly how things work (e.g. go to a factory) as a means of achieving more accurate translation.	1	2	3	4	5
	a. I would be reluctant to go and learn directly how things work, because it would take too much time from me.	1	2	3	4	5
	b. I would be reluctant to go and learn directly how things work because it might diminish the impression the client has of my competence in translation.	1	2	3	4	5

ⁱこのアンケートは学習者用のものであり、プロ翻訳者用のアンケートとは言葉使いの面で多少の相違がある。なお、紙面制約の都合上、一部情報を割愛した。